

祝

2013年3月 博士号(獣医学)取得

荒井延明さん(51歳)

【論文テーマ】人のスギ花粉症モデルとしての犬アトピー性皮膚炎の研究

論文だけでなく自分の周りの環境を評価してもらった博士号です

「ホームページで博士号支援事業を見つけたとき、志は何歳でも持てるという松田理事長の理念に、素晴らしい!と共感しました。学位取得の最終段階に来ていましたが、ぜひ支援を受けたいと応募しました」と語る荒井延明さん。論文テーマからもわかる通り、人の花粉症治療を犬の症例研究から探るというアプローチはめずらしい。

■経験やデータを世の中のためにも活かしたい

子どもの頃から動物大好きで、「ファーブル昆虫記」や「シートン動物記」などが愛読書。「なんで?」という好奇心が強く、実際に飼った動物も、昆虫、爬虫類、両生類と増えていき、飼育ケースが30個になったこともある。高校生ときには自然と、獣医になるだろうなと思っていたという。

獣医師になってからは、動物病院勤務を経て、ペットフードのメーカーにて栄養学に関する部門を統括した。アレルギー対策フードを推進する中で、博士論文の重要なテーマでもある減感作療法に強く関心を持つようになる。減感作療法は、薄めたアレルギーを徐々に体内に投与し、強いアレルギー反応が出ないようにする療法。WHOでもアレルギーの自然治癒を促す唯一の方法と位置づけられている。

「当時の日本では対処療法としてのステロイド投与が一般的で、減感作療法はほとんど普及していませんでした。仕事を通して多くのデータや関連する人材と出会い、これは世の中に還元しないともったいない。動物だけでなく人間にも活かせないかと考えたのが研究を始めた理由です」



童話作家という一面も持つ荒井さん。子どもたちに、家庭生活やエネルギーのこなどを伝えたいと語る。

2004年、現在も勤務する、犬猫の血清検査サービスを行うスペクトラムラボジャパン(株)に移籍したことが、研究をさらに進めるきっかけとなった。

大学の先輩が経営する家族的社風の会社で、荒井さんの研究実績や志を評価し、「ぜひ大学に行って博士号を取ってきなさい」と背中を押してくれた。日本獣医生命科学大学大学院に研究生として所属、指導教授はペットフードメーカー時代に交流のあった先生だった。実験とゼミに通い、途中からは大学の動物医療センターで診療サポートにもあたった。

■周りからの支援や協力に感謝

企業に勤務しながら大学に通い、博士号を取得するのは容易ではない。しかし、荒井さんの場合は少し状況が違う。「会社は、博士号取得を奨めてくれただけでなく、

データの分析・解析を協力してくれて、大学にも快く通わせてくれました。残業や自宅に持ち帰って論文を書くということもなく、おかげさまで家族にも迷惑をかけないですみました」また「今回の博士号を自分の実力だけで取得したとは思っていません。人の花粉症を研究する人は沢山いますが、獣医の立場からの研究はあまりありません。そうした希少性や新規性も含め、ご縁があった会社や人のつながり、蓄積したデータなど、自分の周りの環境を評価してもらったと思っています」と、竹中半兵衛、諸葛孔明、白洲次郎など、裏方の軍師的な人物に惹かれるという荒井さんらしいコメント。

■ペットは普段のしつけや手入れが大切

先日、災害時にペットを連れて避難できるようにするという指針が環境省から示された。

「飼っている家族はもちろんうれしいし、他の被災者の心が動物によって癒される効果もあるでしょう。反面、アレルギーを持つ人、鳴き声や臭いが気になる人もいます。普段からのペットのしつけや手入れなど、飼い主の努力が今まで以上に求められることが予想されます」

日本愛玩動物協会の委員もしている荒井さん。ご夫人とともに殺処分をなくす取り組みや、正しい飼育・しつけ方法の普及にも力を注ぐ。災害時だけでなく、日常の地道なボランティア活動も大切だと考える。博士号取得後は、減感作療法やアトピー性皮膚炎に関する講演依頼が増えた。北海道から九州まで出張が増え、研究中よりも忙しくなったという。